

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420679

研究課題名(和文) アントニン・レーモンドの設計手法に関する研究 戦前のスタッフとディテールを中心に

研究課題名(英文) A Study on the Design Method of Antonin Raymond, Architect, in the Inter-War Period
- A View from His Design Staffs and Their Architectural Details

研究代表者

速水 清孝 (HAYAMI, Kiyotaka)

日本大学・工学部・教授

研究者番号：90615501

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、モダニズムの展開に大きな足跡を残した建築家アントニン・レーモンドの、第二次世界大戦前の日本時代を対象に、その設計を支えたスタッフによって構成される組織に焦点を当て、設計手法の展開と醸成を探ったものである。

文献や現存する図面から、スタッフの全体像や組織の特徴を解明した上で、担当者とデザインの対応を探り、自らが「5原則」と呼んだレーモンドの設計手法がどのように形成されたのか、その過程で現れたデザインがどのように生み出されたのかをある程度明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, the author sought to explore design method of Antonin Raymond, who contributed to the development of Modernism on architectural design, viewed from his works during his stay in Japan, in inter-war period. Especially, the author tried to find the development of his design from perspectives of his design staffs and his design organization.

As a result of the survey, first, the author clarified the whole images of Raymond's design organization through his staffs. Second, the author grasped the relationship between his design staffs in charge and the characteristics of architectural design. Through these results, the author found, in some degree, the design development process of Antonin Raymond.

研究分野：建築史

キーワード：アントニン・レーモンド 設計手法 設計スタッフ 構造技師 デイテール

1. 研究開始当初の背景

建築家の設計手法に関する研究は、すでに豊富な成果がもたれている。とはいえ、そうした研究の多くは、あくまでもその建築家1人に注目してなされる。しかし、実際の設計において建築は、1人の建築家の独創で出来上がるわけではない。ことに近代以降では、多くの場合、複数のスタッフを介して設計され、造られるものとなっている。

それを考えると、スタッフや組織の作品への影響は無視することができない。本研究は、そうした問題意識から着手したものである。

2. 研究の目的

本研究は、上記の背景から、日本の近代建築史に大きな足跡を残した建築家アントニン・レーモンド(1888-1976)の第二次世界大戦開戦前(以下、戦前)の日本時代の設計を支えたスタッフによって構成される組織に焦点を当てる形で、彼の設計手法の展開と醸成を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、着手にあたり行うべき作業が2つある。1つは設計組織の解明であり、今1つは設計に関与したスタッフの解明である。

ともに、『THE JAPAN DIRECTORY』(図1)などの戦前の在日外国企業の名簿や、旧スタッフの杉山雅則が書き遺した戦前のスタッフ

AMERICAN ARCHITECTURAL & ENGINEERING CO.
Architects and Engineers.
1, Yuraku-cho Itchome, Kojimachi-ku.
Telephone No. 1888 (Marunouchi).
L. W. Slack, Managing Director
A. Raymond, Architect
J. W. Rust, Superintendent
K. Takamatsu, Office Manager

図1 『THE JAPAN DIRECTORY』(1921)に見るレーモンド事務所のスタッフ
出典：横浜開港資料館所蔵資料

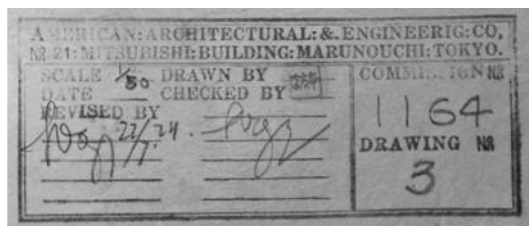


図2 レーモンド作品の図面表題欄に施されたサイン「東京女子大学 中央ボイラー室」(1924)
出典：レーモンド設計事務所所蔵資料

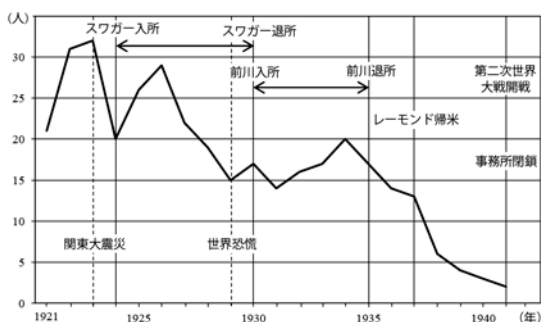


図3 戦前のレーモンド事務所在籍者数

名簿(以下、杉山資料)、『建築学会会員名簿』、各大学の卒業生名簿、レーモンド設計事務所(東京)に残る図面(筆者調査時で、113件、1,935枚(内19枚は協力事務所作成))に記されたサイン(図2)などを資料とした。

続いて、それらのスタッフの経歴を、レーモンド事務所入所の前後を中心に探り、これによって設計スタッフの顔ぶれの変化を把握し、その組織的な特徴を明らかにした。

さらに、そのようなスタッフの経歴を考慮しつつ、図面のサインに各種図書媒体から抽出した情報を加える形で、レーモンドの283件に及ぶ戦前の日本時代の作品の担当者を可能な限り解明し、どのような担当者によってどのような作品が作られたのかを探った。

なお、レーモンドの設計組織名は、時期によって、和名では「米国建築合資会社」・「レイモンド・エンド・サイクス建築事務所」・「レイモンド建築事務所」のように変わるが、本研究では「レーモンド事務所」と総称する。

4. 研究成果

(1) 設計組織の規模の変化

その設計組織の変化を見る。まず、スタッフについて最も詳しい杉山資料には、姓のみ判明する者を含め59名が記される。そこに上記の調査から、雇用形態は不明ながら、H.R.ミルズやW.V.アルフォード、A.ゴボロフといった開設当初に在籍した者や、ヤン・ヨセフ・スワガー(1885-1969)の弟プロコプ・ボジヴォイ・スワガー、半澤清・高木直幹・坂下末蔵・田中喜八郎など16名を加え、計75名のスタッフの存在が判明した。

ただし、出典の1つである図面へのサインの記載自体が1932(昭和7)年以降のものではなくするという資料の限界もあり、この数も必ずしも正確とは言えず、実態の正確な把握を期すにあたっての困難は残っている。

それでもまず、規模としては、レーモンドがF.L.ライトの下から独立した1920(大正9)年には夫人のノエミ・レーモンドを加えて7名であったものが、翌21年には20名を越すほどになり、さらに22年には35名になるという急激な増加を見せていた(図3)。

それ以後には、関東大震災(1923(大正12)年)後の外国人スタッフの減、世界恐慌など景気の煽りを受けた減とその後の増、フォードの仕事が流れたこと(1935(昭和10)年)による減、レーモンド帰米(1937(昭和12)年)後の閉鎖に向けた減があった。

レーモンドの設計組織規模について断片的に指摘する文献はある。しかし、それらを彼の戦前の日本時代を通して把握したものではなく、本研究の試みはその点で意味がある。

(2) 設計組織の性質の変化

次に、組織の変化をスタッフの職種にうかがうと、開設当初から担当者を意匠と現場と製図に分けた分業制を採り、しかもわずかのうちに意匠・構造・機械・監理・土木・製図

のように多くの専門分野を備えた総合技術事務所へと発展する。さらにその後、製図担当の若手と現場担当のベテランという別な分業も生まれ、それによって品質確保の可能な組織としての体を成していった。

(3) 設計スタッフの変化 (入所前)

事務を加えた全スタッフについて、入所前・在籍期間・退所後を中心に一覧の形で示したのが表1である。紙幅の制約でほとんど判読できるものでない点にご寛恕を請う次第だが、表中の縦方向に所属した人物の名が示され、横方向の、濃いグレーで示した部分が、レーモンド事務所に在籍した期間となる。

この表から、設計スタッフの出身、すなわち入所前の所属に注目すると、独立当初には、すでに指摘される内山隈三や藤倉憲二郎といったライトの下から移った者よりも、むしろ広島兵蔵(1923年日本大学高等学校土木科卒)や宮原春守(鹿児島県立工業学校卒)らのように、レーモンドがパートナーを組んだ、L.W.スラック(1887-1970)が在籍したW.M.ヴォーリズの下から移った者が多かった。

スラックは後に商業主義に傾きレーモンドと袂を分かつが、商業主義と縁遠いライトの下にいたレーモンドにとって、日本での設計活動の先達であるヴォーリズの下にいたスラックから学ぶ点は多かったはずである。後にB.タウトが、レーモンドの振る舞いの中に商業的な性質を見てとったことを考えると、あながち誤った推測ではなかろう。

またそれらに加えて、他所で経験を積んだ日本人もいた。例えば官庁から移籍した者もあり、鈴木孫三郎(1908年名古屋高等工業卒)は横河工務所から東京市営繕課を経て、与谷昌金(1914年工手学校卒)は、沖縄県島尻郡役所や近衛歩兵第3連隊を経て移ってきた。

とはいえ、全体としては当初は外国人中心で、そこに職工学校卒ないし、職工学校に通いながら勤める日本人ドラフトマンがいる、という陣容であった。それが震災後、外国人が去る中で、前川國男(1928年東京帝大卒)や吉村順三(1931年東京美術学校卒)ら大卒の日本人建築家予備軍が中心となる。

独立からほどなく起こった震災を機に、レ

ーモンドの建築作品が、それまでのライトの影響を受けたものから離れると語られることは多い。そうしたことがばかりでなく、この震災を挟んだ時期が、レーモンドにとって、様々な意味で変革期であったことになる。

なお、特徴的なスタッフのうち、これまでつまびらかにされることのなかった者について、以下紙幅の許す範囲で記しておく。

①大畑竹造(1924年早稲田大学工手学校卒)は、杉山資料では在籍したとされるが、1929(昭和4)年にライジングサン石油所属と記されたものが職業上の所属として現れる最も古いもので、逆にレーモンド事務所所属とする記録はない。しかし、それ以前の1926-28(大正15-昭和3)年付の図面に名が現れる。

これについては、あるいは学校を出た後、レーモンド事務所に入り、その後ライジングサン石油に転じた可能性も残るが、ライジングサン石油所属の立場でレーモンド事務所に来て図面を描いていた大畑の所属を、杉山が勘違いした可能性もあり、不明が残る。

②女良己之助(1916年早稲田大学工手学校卒)は、1917-19(大正6-8)年にヴォーリズの下に在籍したとされてきた。しかし『建築学会会員名簿』等では自ら一貫して「自営」と書く。ちなみに、自宅を同じくする女良正吉は、女良工務店(所)等の名で、「山邑邸」(1924、ライト・遠藤新・南信)・「近藤賢二別邸」(1925、遠藤新)・「自由学園明日館講堂」(1927、同)といったライトとその弟子の作品の施工に携わっている。

従って女良己之助はおそらく女良正吉の縁者で、レーモンドやヴォーリズの下に図面を描きに来た外注的な人物と考えるのが適切であり、杉山が所属を誤解した可能性が高い。

なお、女良正吉については、1918(大正7)年には「庄吉」などの名で、留学経験のある伊藤文四郎とカリホニア工務所を営み、伊藤の設計による「福田歯科医院」や「古河合名会社大井試験所」等の施工を手掛けた。この正吉と同じく己之助も、新しい時代に対応すべく、気鋭の外国人建築家であるヴォーリズやレーモンドの下に出入りしたのだろう。

表1 戦前のレーモンド事務所のスタッフ

(4) 設計スタッフの変化 (退所後)

様々な転身を迫られることになったスタッフたちの、レーモンド事務所退所後の所属を見て行く。外国人の多くが離日する中で日本に長く留まったのがスワガーとJ.W.ラスト(1922-28在籍)である。監理を務めたラストは、コンサルタント業を起こし、開戦まで横浜で仕事をした。レーモンド事務所の総合技術事務所の性格があつてのものである。

また、日本人では、前川の独立と行動を共にした崎谷小三郎・寺島幸太郎・田中誠はよく知られ、戦後長く前川の作品を支えた。

その前川のように自営した者は多い。例えば、石川恒雄(1934-38頃在籍)・中川軌太郎

(1922-40 頃在籍)・吉村順三 (1926-41 在籍) がいる。杉山雅則 (1921-41 在籍) は一時自営するものの、三菱地所に転じている。橋本正智 (1923-24 在籍) も直後、富永謙吉 (1916 オレゴン大学卒) と富永橋本建築事務所を起こし、文部省から移った長谷川正助 (1921-22 在籍) も、戦後には自営した。

そして、著名な建築家の下に移った者もいる。主な者を挙げれば、今井猛雄 (1924-28 頃在籍) は山下壽郎の下に、田中喜八郎 (1933-35 在籍) は木子七郎の下に、沢木英男 (1924-38 頃在籍) は早稲田の人脈で竹田米吉の下に移る、といった形であった。

その一方で、官庁組織の設計部門の華やかだった時代を反映して、鈴木忠雄 (1921-24 在籍) や高橋武士 (1936 頃在籍) は東京市建築課に、鈴川孫三郎 (1921-22 在籍) も自営を経て札幌市土木課に、高木直幹 (1934 在籍) は東大営繕課に職を得た。また、構造を担当していた服部茂 (1924-31 頃在籍) の大倉土木のように建設業に移った者もいる。

このように、辞したのち設計事務所を営み、あるいは別な設計事務所や官庁・建設会社の設計部門に移るのはごく自然だが、酒井勉 (1924-36 頃在籍) は武蔵工業専門学校に、南和夫 (1935 年頃在籍) は内藤多仲の事務所を経て早稲田大学に、といったように教職に就く者もあった。さらに、南と同じく戦後早稲田に職を得る小野禎三 (1930-40 頃在籍) は仕事上の付き合いがあった日本電気に移っている。

(5) 設計スタッフの変化 (戦後戻った者)

そのように 1941 (昭和 16) 年の事務所の閉鎖までに様々な場所に移ったスタッフの中で、自営した者の戦後を見ると、例えば、石川・中川は再開したレーモンド事務所に戻り、吉村・杉山は戻らなかった。

自営時を中心に自身の名で発表した作品に照らすと、戻った者の作品には、柱の芯を外してサッシュを設けるといったレーモンド作品の影響が見えるが、その一方で (図 4)、戻らなかった者の作品には、アーチや持ち送りが用いられるなど、総じて影響が薄い。このことから、身に沁み込んだレーモンドの影響から離れ難い者が戻り、逃れた者は離れた



図 4 「熊谷邸」(設計: 石川恒雄, 1941)
出典: 『住宅』Vol. 26, No. 2, 1941. 2, p. 34.

ことが分かる。

(6) 設計スタッフと担当作品

続いて設計スタッフと担当作品の対応を見た。表 2 は、レーモンドの「作品集」(『アントニン・レイモンド作品集』城南書院, 1935)・「詳細図集」(『ANTONIN RAYMOND ARCHITECTURAL DETAIL 1938』国際建築協会, 1938)に掲載された作品を中心に、その担当者を示したものの抜粋である。

以下、特徴的なことについて触れていく。

① ヴォーリズ風・ライト風

レーモンドの設計ではない「早稲田協愛学舎」(1922) について述べておく。この設計には、同じ敷地内に建つ「スコットホール」(1921) に携わったスラックの関与が指摘されている。レーモンド事務所に残る図面には「DORMITORY FOR WASEDA BAPTIST BROTHERHOOD IN TOKYO」の名でこれと酷似した建築の実設計図 (図 5) があり、これらの修正欄にはスラックのサインがある。つまりこの建築は、「スコットホール」の設計半ばでヴォーリズの下を去ったスラックが、新たな設計組織で携わったものと考えられる。

なお、この時期のレーモンド事務所の図面には、図題の表記法等の点でライトの影響を受けたものとヴォーリズの影響を受けたものがあるが、この図は後者のものである。

この例に見るように、最初期のレーモンド

表 2 レーモンドの設計作品のうち、「作品集」「詳細図集」掲載作品の担当者 (抜粋)

作品名 (作風) 年	担当		
	担当	意匠 建築	構造
田中次郎郎 (ライト風) 1921 年	-	女良己之助[V]:製 高木健次[W]:確 レーモンド[W]:製 修	-
後藤新平郎 (ライト風) 1922 年	内山隈三[W]	-	-
福井菊三郎郎 (ライト風) 1923 年	-	女良己之助[V]:製 ラスト:確 レーモンド[W]:修	女良己之助[V]:製 ラスト:確 レーモンド[W]:修
霊南坂の自邸 1923 年	中川軌太郎:製 中屋晴幾 杉山雅則[W] 内山隈三[W]	-	-
シーバーヘクナー 生糸工場 1925 年	-	中川軌太郎:製	中川軌太郎:製 スワガー:確
聖心学院 1926 年	高木健次[W]	古藤昂:製 土橋涼:製 土田徳次郎:製	スワガー
聖路加国際病院 (ペレ風) 1928 年	フォイエルシュ タイン[P] (協同設計)	レーモンド[W]:確 中川軌太郎:製	レーモンド[W] 製・確 スワガー:製 内藤多仲 酒井勉 中川軌太郎:製 小野禎三:製
ライジングサン石 油会社社宅 1929 年	フォイエルシュ タイン[P] (協同設計)	-	スワガー 今井猛雄:製 酒井勉:製 寺島幸太郎:製 小野禎三:製 中屋晴幾:製・確
赤星喜介郎 1932 年	-	吉村順三	酒井勉:確
軽井沢夏の家 1933 年	-	-	小野禎三:製
川崎守之助郎 1934 年	与谷昌金 吉村順三	-	中屋晴幾 酒井勉:製
聖ポール教会 1935 年	レーモンド [W]#1	吉村順三:階段#2	-

※: 「作品集」・「詳細図集」掲載は全 47 作品。斜体: 原案。年: 「作品集」記載年。担当; 太字: 「作品集」が出典。名前後の文字: レーモンド設計事務所所蔵図面における担当者種別 (製: 製図、確: 確認、修: 修正)。[V]: ヴォーリズ事務所出身者。[W]: ライト事務所出身者。[P]: ペレ事務所出身者。■: 早稲田大学出身者。#1: 『国際建築』Vol.11, No.10, 図版, pp.267-270, 1935.10. #2: 『吉村順三・住宅作法』世界文化社, pp.82-83, 1991.

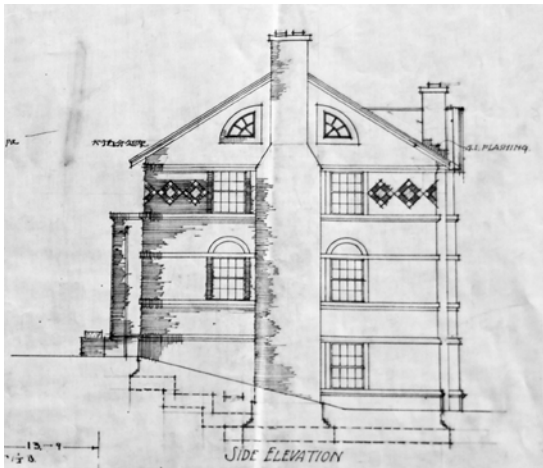


図5 「DORMITORY FOR WASEDA BAPTIST BROTHERHOOD IN TOKYO」立面図
出典：レーモンド設計事務所所蔵資料

事務所の作品には、従来指摘されるライトの影響のあるものに加えて、ヴォーリズの影響の見られるものもあった。

これを担当者の出身に注目すると、独立当初にはまず、ヴォーリズ事務所出身ないし女良のようにヴォーリズ作品に携わった者によるヴォーリズ風があり、続いてライト出身者によるライト風や、ヴォーリズ出身者によるライト風の作品（「田中次郎邸」(1921)等）が現れたというようになる。

続いて、ライトの下から来た内山隈三らによる背面がモダニズムを思わせる「アンドリュース&ジョージ商会」（1922）やデ・スタイル的な「霊南坂の自邸」（1924）が現れるが、ライトから来た者は、内山を除いて1924（大正13）年頃を境に図面に名が登場しなくなる。退職者のある傍ら、小茂田半次郎や高木健次のように現場に役割を移した者もいたためである。

②ペレ風・和風・コルビュジェ風

これに続いて組織に変化が見えるのが、ベドジフ・フォイエルシュタインの名が現れる1925（大正14）年以降である。新たな作風の実現を、外国人スタッフを導入することで得られる刺激に期待したのだろう。

フォイエルシュタインの担当作には、「ライジングサン石油会社事務所」（1926）・「聖路加国際病院」（1928、原案）があり、ペレ風の、いずれも当時のレーモンドの代名詞となる作品である。杉山が「レーモンドはペレー・スタイルが好きでした。だからペレーのところからフォイエルシュタインを連れてきたのですよ」と語ったように、新たな刺激を期待した証拠であり、その果実である。

その後の意匠としては、日本建築を良く知る吉村によって「赤星四郎週末住宅」（1931）などの和風が、そして、前川同様コルビュジェの下にいたフランソワ・サマー（1936-39頃在籍）によってコルビュジェ風がもたらされる。前川は「仏蘭西大使館」（1930）を担当し、コルビュジェの「スイス学生会館」

（1932）を見たに違いないサマーは、似たビルディングタイプで、後にブリーズソレイユと呼ばれる日除けを用いた「ポンディシェリーの僧院宿舎」（1942）を実現した。

このようにしてレーモンドは、ヴォーリズ・ライト・ペレ・和・コルビュジェといったように、それぞれのスタッフから、それらの出身事務所の情報を吸収したことになる。

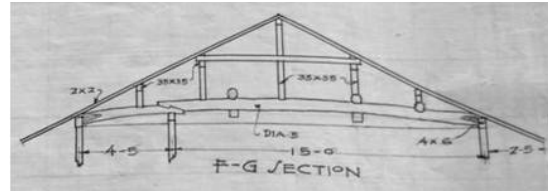
③構造の担当者

作品の構造担当者に注目すると、震災前のH.R. キングスレイからスワガーに、そして中屋晴幾・酒井勉・小野禎三といった当時最先端の耐震理論を持つ内藤多仲門下の、早稲田大学出身者になっていく。

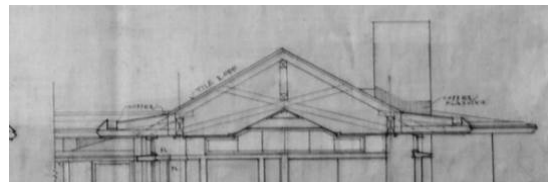
これをさらに構造種別ごとに見ると、鉄筋コンクリート造（以下、RC）の担当は、震災前にキングスレイであったものが、震災後にはスワガーを経て中屋晴幾・酒井勉・小野禎三に、木造の担当は、震災前にキングスレイであったものが、震災後にはまずスワガーに、続いて小野禎三といったように変わった。

④木造小屋組の変化

震災後のレーモンド作品の構造的な特徴としては、RC造が増え、軽量化の意味もあって、木造の小屋組が「和」から「洋」へと移ることがある（図6）。さらに震災後は木造でも構造に秀でたスタッフが担当しており、構造面でのチェックもなされていた。



震災前の和小屋：「日本電気株式会社社宅」（1921）



震災後の洋小屋：「萩原邸」（1924、構造：スワガー）

図6 震災前の和小屋と震災後の洋小屋

出典：レーモンド設計事務所所蔵資料

⑤鉄筋コンクリート打放し仕上げ

RCによる外装の打放し仕上げは、「霊南坂の自邸」（1924）で最初に全面に試みたとされるが、実際には、土浦亀城が「コンクリートを打った後堰板を可成早く外し、トロを一面に薄く塗り」、その後、「器械で全表面を一様にはつり取った」と記すように部分的な採用に留まった。それが全面的に採用されるのは、前川らとの検討の中で行われた「川崎守之助邸」（1934）と考えるべきものであった。

(7) ヤン・ヨセフ・スワガー

意匠・構造の変革期だった震災の前後に構



図7 「ステイブルトン邸」(1928)

出典：『合資会社清水組』土木建築資料新聞社，p.59, 1935.

造技師としてレーモンドが招いたのがスワガーである。しかしスワガーは後に構造の担当を早稲田出身者にとって代わられている。

このスワガーの位置づけを考えるため、レーモンド事務所でのスワガーの担当作を見ると(表2)、確かに構造を手掛け、木造を含め主に住宅に携わった当初から、次第にRCの大規模建築が増える。その一方で、意匠を担当した作品も1つだがある。大学で建築を学んだ教育的背景と、後の建築家としての独立を考えるとこれはむしろ自然であり、意匠を担当したものは他にもあるものと考えられる。

そうした例として筆者は、図面の修正者の形で携わった「ライシャワー邸」(1926)や同時期の作品で担当者不明の「ステイブルトン邸」(1928、図7)は、スワガーが意匠も担当したものと推測する。2作品はともに最上階のスラブまでをRCとしたラーメン構造に木造の小屋組を載せたもので、窓も小さく建物重量は見るからに重い。これは、震災後、軽量化に努めたレーモンドの志向とは異なる。また、ともに屋根勾配が急で、意匠も古い。こうした点を見るとこれらはスワガーが意匠を担当したと見るべきだろう。

その所員時代のスワガーをレーモンドは、「厳格な現場監督」と讃える傍ら、「耐震構造は可能ながぎり軽くすべきであると彼に納得させるのに、長い時間がかかった」と重さを嘆き、またその独立を、幻想を抱いたためと酷評した。構造技師として招いたものの期待にそぐわず、不満な様子が見える。ここに、震災後にレーモンドの設計組織が外国人から日本人へと軸を移すことも踏まえると、意匠・構造ともに担当に不適とされ現場に廻ったスワガーはレーモンドの組織にとって、転換期の終りを象徴する存在であった。

(8) レーモンドの「5原則」の生成過程

前川はその在籍時に設計手法として「明確に意識化されたものは、レイモンドにはあまりなかった」と語った。また、「この時代[1937年]のレーモンドは、戦後自ら打ち出す(略)「5つの原則」[単純・直截・正直・自然・経済性]をまだ確立していない。2年後(略)には、<経済性、太陽、空気、自然、常識、ユーモア>を挙げているに過ぎない」との指摘もある。それが戦後になると一転して、ス

ワガーが彼の作風を呼んだ「レーモンド・スタイル」や、自身が唱えた設計の「5原則」の語が登場する。

これらの生成過程を探ると、まず、「5原則」は、戦前の様々な試みの成果として「作品集」を編む中で言語化が始まったと考えることができ、続いて、編纂中の思考を経て、自身の斬新な試みに絞ってまとめたものが「詳細図集」であり、離日後の思索によって抽出された言葉が、他の建築家の真似でなく、職人に学び日本の自然や伝統を基盤にした「5原則」であり、それが印象的な作風を纏ったものが、後にスタッフが「レーモンド・スタイル」と呼ぶものとなる。

従ってその設計手法は戦前に築かれ、自身の才能もさることながら、万能の権威者たる建築家がスタッフを使役する形でなく、スタッフとの協同によって獲得されたものである。こうした点にレーモンドの先進性があったことになる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

- ①速水清孝「戦前のレーモンド事務所の設計スタッフと組織について」『日本建築学会大会東北支部研究報告会 計画系』Vol. 79, 2016, pp. 89-92. 査読無
- ②小室加津彦・速水清孝「構造技師・建築家 ヤン・ヨセフ・スワガーの日本時代の建築作品に関する考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集(建築歴史・意匠)』2014, pp. 653-654. 査読無
- ③小室加津彦・速水清孝「構造技師・建築家 J. J. スワガーの建築と設計活動」『第56回日本大学工学部学術研究報告会講演要旨集 建築学部会』2013, pp. 5-8. 査読無
- ④小室加津彦・速水清孝「草創期のレーモンド事務所の設計スタッフについて」『日本建築学会大会東北支部研究報告会 計画系』Vol. 76, 2013, pp. 55-56. 査読無

[学会発表](計3件)

- ①速水清孝「戦前のレーモンド事務所の設計スタッフと組織について」『日本建築学会大会東北支部研究報告会 計画系』2016. 「東北大学(宮城県仙台市)」
- ②小室加津彦・速水清孝「構造技師・建築家 ヤン・ヨセフ・スワガーの日本時代の建築作品に関する考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集(建築歴史・意匠)』2014. 「神戸大学(兵庫県神戸市)」
- ③小室加津彦・速水清孝「草創期のレーモンド事務所の設計スタッフについて」『日本建築学会大会東北支部研究報告会 計画系』2013. 「岩手県公会堂(岩手県盛岡市)」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

速水 清孝 (HAYAMI, Kiyotaka)

日本大学・工学部・教授

研究者番号：90615501